

寿命を迎えたと思っても 服はまだ活用されます!

残念ながら着なくなってタンスで眠っている服、もうヨレヨレという古着など、捨てるしかないかな……とう衣服が、意外な方法で活用されている例をご紹介します!

子どもたちのワクチンに

不用になった衣類を90ℓの袋ひとつ500円で回収する引越業者が増えています。500円を使って回収された衣類は開発途上国へ運ばれてリユースされるうえ、子どもたちのワクチン代をかうお金になります。服を処分して環境配慮と国際貢献ができるシステムです。



左/通常、衣類はリサイクルショップに持ち込んでも大半は引き取ってもらえませんが、すべて回収します。

右/回収した衣類は開発途上国でリユース。質の高い日本の衣類は、古着であってもとても人気があります。



日本リユースシステム
<http://www.nrscorp.jp/>

くつになって再利用

役目を終えた古着などの布を裂いて織り直した日本の伝統的なリサイクル素材が裂織。コロンビアの「チャドウィック サキオリ」はこの裂織をアッパーに利用しています。貴重な木綿を大事に使っていた先人の知恵もつた文化を受け継ぐアイテムです。



「チャドウィック サキオリ」¥8400〜。2009年グッドデザイン賞受賞。さまざまな布を再利用した裂織を使用。世界でたったひとつの商品です。

コロンビア
<http://www.columbiasports.co.jp/>

バイオエタノールに

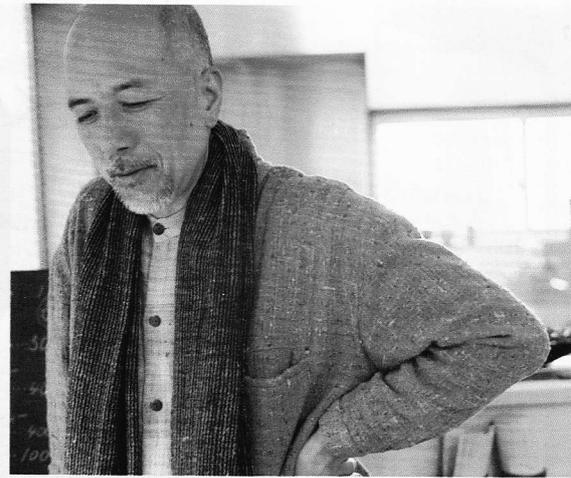
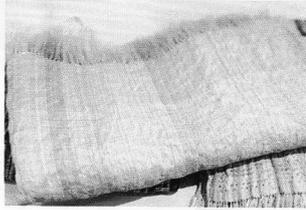
無印良品では、2009年に衣料品の回収モデル実験として開始された「FUKU-FUKUプロジェクト」に参加し、衣料品の回収実験を実施しています。回収された衣料品は、自然エネルギーであるバイオエタノールになるほか、工業用原料として100%リサイクルされます。



国の支援を受けて、衣料品の回収→再生資源の販売に至るリサイクルの仕組みを検証するプロジェクト。昨年は32店舗で3カ月間実施。今年も実施が予定されています。

良品計画
<http://ryohin-keikaku.jp/>

右/ギッチャ糸のカーディガンとナーシ糸のマフラーがよく似合う田中ぼんさん。「本当はいちばん長い時間、いちばん肌の近くにある下着こそ、こだわるべきなんだよ」と、自身は長年絹のふんどしを愛用しているとか。下/藍の生葉で染めたタッサールシルクを使ったストール¥44,100。新品はまるで麻のよう。スタッフの畑島さんも愛用しています。



真木テキスタイルスタジオはインド中央部の農村部に工房を構えています。主に使うタッサールシルクの繭は、沙羅双樹の林で蚕を放し飼いにして作られています。日本の家で飼う蚕とは違っています。



長年使ってなじんだ服は
かけがえのない宝物

糸は機械で紡ぐとまっすぐで均質になるけれど、手で引くとウェーブがかかるそうです。さらに手織りすることで布全体が不均質になり、肌にもなじむといえます。「手作りの糸は機械でやるのとは違って、糸のまわりのセリシシという成分をほどよく残せるので、力強い布になります。普通はほとんどが機械で紡いだ絹なので、うちの服を見ると初めは絹だと信じられないんです。新品はパリパリとした麻のような触感。これが長く着ているうちにやわらかくなり、風合いも落ち着いてきます。着る人が育てていく服なんです」と田中さん。例えば新しいストールをなくしてしまってもさほど

ショックではないけれど、せっかく長く育ててきた古いものをなくしたら悲しい。そう思える服を作っているのだといえます。「本来、衣類は用途に合わせて持つのではなく、どれくらい着古されたかで用途を変えていたんです。初めは外着として使い、古くなってきたら部屋着にする。そして体に完全になじむまで着古したら寝間着にする。さらにボロになってしまったら、最後は裂いて織り直したり、掃除道具のはたきにする。こうして使い切つてあげるのが、生まれてきた服にとつても、いちばんうれしいことじゃないかな」流行にながされない服を愛情深く着続けていく。はたきになるまで愛し続けた服の存在は、人生のよきパートナーとして、いつまでも私たちの心に残るでしょう。